

田舎の応援歌 CDに

南足柄市塚原で農園を経営する古屋宣雄さん(63)が学生時代に作詞作曲したフォークソングが、40年の時を経てCDでリリースされた。曲名は「過疎」。寂れゆく農村の哀愁を表現しつつも曲調は明るく、CDではフォークグループBUZZ (バズ) の東郷昌和さんがポップな雰囲気で歌い上げた。古屋さんは「この曲が都市と農村を考えるきっかけになつてほしい」と話している。

(丹下信之)

学生時代に作詞作曲

古屋さんは元南足柄市職員。定年退職後、農業に本腰を入れた。2haの農地に、苗を植えて足かけ2年で収

ワリ、メロンより甘いトウモロコシンなど高付加価値の農作物を栽培し、直売で客を呼び込んでいる。

歌い出しから、草が生い
茂つて道幅が狭くなつてい
く寂しい集落の様子を表現
なる



田舎の応援歌になればと、「過疎」をPRする古屋さん（南足柄市で）

あれから40年。地方では、過疎を通り越した限界集落も増えてきた。「あの曲を

編曲者の内宮悦子さん（小田原市）が農園の客となり、東郷さんを紹介された。「過疎を何とかしたい。再びフオーラブームを起こしたい。歌で社会貢献したい」と、東郷さんに思いを打ち明けたところ、二つ返事で協力を約束してくれた。コースティックギターの第

郷さんが生歌を披露した。古屋さんは、CDを聴いて感化された都会の人が、農村へ移住することを期待している。農地を借りて高付加価値の農作物を作るノウハウも提供しており、「都会に住んでいた人は知り合いでいる」というマーケットを都合

田舎の“応援ソング”にで
きないだろうか。古屋さ
んは農林水産省にデモCD
を送り、イベントで使って
ほしいと要望した。

「70歳代の人たちから予約が殺到。古屋さんは分かりやすく覚えやすい曲。レコード世代には懐かしいのでしょう」と話す。今月14日に東京・日比谷公園で行わ

い思い出』も古屋さん作曲で、いつも東郷さんと平野さんによる録音だ。問い合わせは古屋さん（090・7849・9200）へ。

一人者・平野融さんとも出
会い、2人によるCD化が
決定した。

に持つてゐる」として、フ
ォーク世代の人らに“移住
・就農のススメ”を説く。